

〔第26回 学術集会シンポジウムⅠ〕

事例研究を通して学んだこと

淀川キリスト教病院

藤原 真弓

時代の進化に伴い家族のかたちは変化し、多様化する家族に対する家族看護実践は困難さを増している。家族看護学の発展のため、家族看護実践を積み上げ、分析し可視化することの重要性を改めて実感した。今回のシンポジウムで、論文が掲載されるまでを改めて振り返る機会になった。

今回、家族の延命治療に対する意思決定に関わり、自らの成功事例を振り返り、分析することで、今後のより良い家族看護実践につなげることができると考えた。しかし論文作成までは数多くの困難があり、中でも患者・家族の反応をありのままに描写することに難渋した。査読者、編集者、スーパーバイザーの助言のもと、論文を作り上げていくことで、伝えなかったことが表現でき、論文が生き生き

してくる喜びを経験した。さらに、事例を論文としてまとめる過程で、発表者自身も無意識に行っていた実践がもたらした副次的効果に気づくこともできた。シンポジウムという形で、事例研究の意義、論文作成時の注意点などの学びを深められたとともに、他者の論文掲載に至るまでの困難感や経験を聴くことで共感し、新たな発見もできた。

以上のように、事例研究を論文としてまとめることは非常に意義深く、今後も多くの家族看護実践の事例研究が論文として発表されることが重要である。そのためには、ひとつの事例を詳細に分析し、実践者だけでは表現しきれない部分を引き出すなどのサポート体制が整っていくことが望まれる。